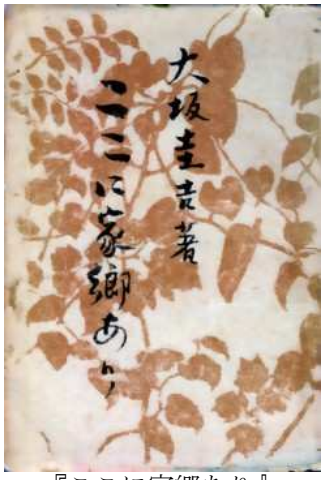
【 おおさか　けいきち 】

大阪圭吉

１９１２（明治４５）年～
１９４５（昭和２０）年

戦前における数少ない本格探偵小説作家。
新城市の旧家「鉈屋（なたや）」の分家である旅館「鈴木屋」に生まれ、豊橋商業高校を３年のとき中途退学。
東京の大学を卒業後、新城に戻って執筆活動を続けた。
フィリピンのルソン島にて、33 歳で戦病死。

大阪圭吉
鈴木壮太郎氏所蔵



『ここに家郷あり』
大阪圭吉／著　新興亜社／発行

生い立ち

新城市本町で数代続く旅館「鈴木屋」に父良平、母ことの長男として生まれた。本名は、鈴木福太郎といった。

新城小学校を卒業後、豊橋商業学校（現豊橋商業高校）へ進んだが、3 年で中途退学した。その理由は定かではないが、一説には、南米に憧れて 3,4 人の友達とブラジル渡航を企てたためとも、また左翼思想に興味を抱いたことが学校で危険視されたためともいわれる。

心機一転、上京して勉学に打ち込んだ圭吉は、日本大学商業学校を 1931（昭和 6）年に卒業した。その年、坂上蘭吉のペンネームで「中央公論」の懸賞小説に応募したが落選。翌年には、「日の出」の懸賞募集に『人喰い風呂』を投稿し、こちらは佳作入選したが活字化はされなかった。

学業を卒（お）えた圭吉は故郷の新城に戻り、それ以来ほとんどの探偵小説は故郷で執筆された。

探偵作家「大阪圭吉」としてのデビュー

圭吉の探偵作家としての出世作は、1932（昭和 7）年、「新青年」に、推理作家甲賀三郎の推薦を受けて掲載された『デパートの絞刑吏』であった。ペンネームは、末弟からの手紙に「大阪より　圭次」とあったことに由来するといわれている。（『大阪圭吉探偵小説選』解題より）

その後、「新青年」に『カンカン虫殺人事件』『白鮫号の殺人事件』『気狂い機関車』を発表、また 1936（昭和 11）年にはこれらをまとめた第 1 著書『死の快走船』を刊行した。同書には江戸川乱歩、甲賀三郎が序文を寄せ、出版記念会が開かれた。さらに、同年には『三狂人』『動かぬ鯨群』などの秀作を発表している。

『死の快走船』出版記念会
（昭和 11 年 6 月 3 日）
鈴木壮太郎氏所蔵

『江戸川乱歩と13人の新青年』
ミステリー文学資料館／編
甲賀三郎他／著　光文社／発行

江戸川乱歩も期待

江戸川乱歩は、評論『日本の探偵小説』で圭吉のことを次のように書いている。

“この作者も小栗虫太郎と同じく登場以来日浅く、作量も「新青年」誌上ではわずかに 5,6 篇に過ぎないけれど、探偵小説を離れがちな日本の作家の中にあって、純粋の探偵小説のみを目がけて精進を続けている意味でむしろ特異の作家と云うべく、理智探偵小説というものを、その本当の意味で摑んでいる点では、先輩作家の間にも多く類例がない程だと思う。（中略）純粋理智を愛しながら、充分大衆性をも備えているこの作者には、将来の大成を期待していいのだと思う。”

33歳、ルソン島にて戦病死

しかし、1938（昭和 13）年以後時代が戦争一色になるとともに作品がユーモア小説や防諜小説へと変わっていった。

その圭吉も、やがて 1943（昭和 18）年に召集され、満洲に渡った。その後フィリピンへ転戦し、1945（昭和 20）年ルソン島で戦病死した。33 歳の若さであった。

『大阪圭吉探偵小説選』
大阪圭吉／著
論叢社／発行

戦後に再評価

1970（昭和 45）年に、『三狂人』が『新青年傑作選Ⅰ　推理小説編』に採録された頃から、徐々に再評価の気運が高まっていった。その決定的な役割を果たしたのは鮎川哲也で、「小説推理」に『幽霊妻』（遺稿）の掲載を遺族に勧め、また、新城市へ夫人と長男を訪ねてインタビューを行い、『人間・大阪圭吉』をまとめている。鮎川は、その後も『とむらひ機関車』、『闖入者（ちんにゅうしゃ）』、『気狂い機関車』など次々と採録した。（『大阪圭吉探偵小説選』より）

また、1971（昭和 46）年には、県立時習館高校の文化祭で《掘り起こす推理の鬼才「大阪圭吉展」》と題してその人と作品が紹介された。

圭吉没後６５年経った 2010（平成 22）年、横井司監修『大阪圭吉探偵小説選』が刊行されたことから、その作品の持つ魅力が現代でも通用することがわかる。

現在、新城市では圭吉の長男夫婦が健在で墓を守っている。

代　表　作　品

著　書　名	刊　行　年
デパートの絞刑吏	1932（昭和 7）年
気狂いの機関車	1934（昭和 9）年
とむらひ機関車	同上
灯台鬼	1935（昭和 10）年
闖入者	1936（昭和 11）年
死の快走船	同上
三狂人	同上
動かぬ鯨群	同上
坑鬼	1937（昭和 12）年